

②日本国特許庁 (JP) ①特許出願公開  
 ①公開特許公報 (A) 昭61-6097

②Int.Cl.  
 B 63 H 1/38  
 A 63 B 38/00

識別記号 市内整理番号  
 7817-3D  
 6847-2C

②公開 昭和61年(1986)1月11日

審査請求 未請求 発明の説明 (全3頁)

②発明の名称 移進用ひれ

①特許請求 昭59-125718  
 ②出願日 昭59(1984)6月18日

②発明者 増田 紀一 大阪市日吉台4-14-12  
 ②出願人 増田 紀一 大阪市日吉台4丁目14-12

明細書

1. 発明の名称 移進用ひれ

2. 特許請求の範囲

- 所要ひれの、頭と両側邊との外側を成形したひれ中に、筋状を膜を配置することを特徴とする、移進用ひれ。
- ひれ形状、筋形状のものである、特許請求の範囲第1項記載の移進用ひれ。
- ひれ形状、筋形状のものであって、側面両側邊を剥離するため付け具を有するものである、特許請求の範囲第1項記載の移進用ひれ。
- 筋状を膜は、ひれ先では側邊方向へ偏位し後方へ至るにしたがって、逐次、極めて後方へ至るものである、特許請求の範囲第1項記載の移進用ひれ。
- 筋状を膜は、繊維して、筋をついたものである、特許請求の範囲第1項記載の移進用ひれ。

3. 発明の特徴を記載

(実施上の利点分野)

今迄、ゴム靴・ゴム長等の浮遊物体を、水中で剥離する用ひれに使って、暫くに油膜せしめるための浮遊用ひれに係る。

(使用の技術)

筋形状の先を、板状のひれに成形し、水を吸って剥離するものがもった。

筋形状の先に、板状の板状ひれを付け、水を吸収しながら、剥離するものがあった。

筋形状の先に、筋形状の板状ひれをつけ、水を吸収しながら、剥離するものがあった。

(発明が解決しようとする問題)

一極化された成形のひれや筋形状のひれは、直面して、水中を剥離するため、<sup>(筋)</sup>筋状が大き過ぎて固定される筋形状の2分の1~3分の1が、ひれの剥離や反りに寄りされ、剥離に陥られる性質を認識していた。

ひれの筋は、剥離用形の外観位になるため筋が曲がった。

剥離したひれを上下に剥離する場合には、ひれ

の後部が、遊びのため浮上や沈下するものは、回転が強調に出でなかつた。

危険部・ストッパーに集中して大きな力が加わり、故障の原因になつた。

ひれが大きくなると、必要な速度は増加するので、危険になつた。

以上の理由によって、推進効果は良くなかった。  
〔回転を加えするための手段〕

後者の中のひれを廻し、所要角ひれの、回と回転との両界を改善したひれが、駆動を廻を廻したものである。

〔作動〕

三方を固定した構は、駆動により水の抵抗を受けて、ひれ先より駆動されていよいよ後方に方へ、進歩大きさを円弧状の内壁を作らせる仕質がある。

この内壁で水を貯えるため、後部面板が同じ駆動のひれより効率は良くなる。

この内壁は、ひれの回く方向に対して、駆動した面で出来ているため、流入作用で推進が出来る。

この内壁の邊は、長手する駆動の駆動加減、特に

特開昭61-6097(2)  
つけた筋の位置や筋により、計画的に、駆動の内壁・ラッパ状の筋を作らすことが出来る。

との内壁は、駆動の先端で前やかに反転し、進行に対応する内壁を作る。即ち、先端に於てひれ筋の動きが停止すると、水をはらんで駆動していだる駆動筋は、拘束を解かれて浮遊状態になる。今まで既に示されて駆動の運ると方向面を考えられ大体は車には止まらない。この内壁は駆動に於てひれ筋の反対側にかしやられ、反転した内壁を作らせる。故に、駆動の進行面は推進の方に供することが出来る。

以上の作動点の構造により、速度のものより車に推進効果を失くすことが出来る。

〔駆動効〕

この駆動の構成を、更に詳しく説明を廻ししながら説明する。

第1回は、この発明の第1実施形態の1例を示す平面図である。

ひれ舟1は、所要角ひれの、第2と第3駆動面。

3の外界を成形したもので、駆動体2に取り付け一体となし、平面方向に張れるものである。又は、ピストン駆動するものである。

このひれ舟に、駆動を廻すを駆動して推進角舟ひれとする。

第2回は、この発明の第2実施形態の1例を示す平面図である。

第1実施例のひれ舟1を、非対称ひれ舟1とし大もので、駆動停止所は駆動を廻すが伸縮された状態であるが、駆動により、円弧状の内壁を作ると共に、ひれ舟の両端3、4の筋を廻め、内壁の筋が出来あくし、駆動のたまて駆動を廻すを伸縮するものである。第1実施例と比較すると、駆動を廻すは、所要の内壁が出来あくし、水を貯えるが、駆動面の駆動により逆に推進作用は内上する。

また、駆動の強制に応じて内壁面の傾斜が変化する。

第3回は、この発明の第3実施形態の1例を示す平面図である。

ひれ舟1は駆動体であって、その開口部の両側辺3、8を駆動するタイマー6と駆動付けねじ7を廻め、左側開口部の巾を小さくすることが出来るもので、即ち、駆動した駆動を廻すが駆動を止めることが出来る。

第2実施形態と異なる作動点は、駆動の先端で、たるみをもつた駆動を廻す4は、駆動を解かれて浮遊状態になり遊走する水の導で、ひれ舟1の反対側に廻しやられ、内壁の筋が反転するため、全駆動面を推進の方に供することが出来る。

第4回は、この発明の第4実施形態の1例を示す平面図である。

ひれ舟1に、駆動を廻す7を、ひれ舟2では側面3、8両側へ強張し、後方へ張るに従って、逐次、ゆるめて駆動したものである。駆動の側面に傾斜をくし、計画した内壁の駆動筋を廻めたり、第5実施形態と同じ駆動作用をする。

第5回、第6回、第7回は、この発明の第5実施形態の改例を示す平面図である。

第1、第2、第3、第4の実施形態の説明した

累積を重々に、所要形状の図8を入れることにより、ひれの後面を分に応じて並べることが出来る。

内面の面が外側面の形状となし最も優れた効果作用を発揮する。

〔初期の効果〕

三方を固定した頭で構成したひれの頭は、円盤状の内面を重ねたり次を並べるから、平板状ひれより効率が多い。

内面の面は、運動方向に並列して運動する舟形であるから、方向性に優れた並入作用をする。

この内面は、運動のためで、曲やかに反転し運行に応じた内面を重ねて作る。

ひれの面に作用する抵抗力は、ひれ部に分散され、船頭部はストッパーのような効果がない。

内面の面は、計画的に並べることが出来る。

新造が非常に簡単、被拖曳物の取り付けが容易かつ簡単である。

4. 製図の簡単を説明

図1図は第1実施形態を示す平面図

図2図は第2実施形態を示す側面図

特開昭61-6097(3)

図3図は第3実施形態を示す側面図

図4図は第4実施形態を示す側面図

図5図、図6図、図7図は第5実施形態を示す平面図である

1……ひれ骨、1'……運動性ひれ骨、2……筋、3……側面、4……筋膜を張、5……筋筋骨、6……ライヤー、7……筋筋混合ねじ、8……筋

特許出願人 鈴田紀一

